

## 平成 26(2014)年 九州情報大学所属研究者による業績

秋吉 浩志 「産学連携型ゼミナール活動におけるキャリア形成に向けての取り組み  
I」・ソーシャルメディアを利用した事業実践型ゼミナールの試み  
について

九州情報大学研究論集 16 巻, P47-53, 2014 年 3 月

産学連携型ゼミナール活動におけるキャリア形成に向けての取り組み  
ーソーシャルメディアを利用した「アクティブ・ラーニング」への試  
みに向けてー

九州情報大学研究論集 17 巻, 2015 年 3 月

遠藤 真紀

「ISO 規格改定が与える中小企業等への影響」（研究報告）

日本経営診断学会九州部会（於：くまもと森都心プラザ）2014/09/07

岸川 洋, 栖原 淑郎, 合田 和正

「ロボットアプリ作成を活用した学修」ーロボットコンテスト参加を通  
してー

九州情報大学研究論集第 17 巻 2015 年 3 月.

木下 勝一

「私的な基準制定の公私協働」

『会計』（森山書店）186 巻 3 号、361－374 頁、2014 年 9  
月

「私的な基準制定と公私協働関係の 3 つの類型」

『産業経理』（産業経理協会）74 巻 3 号、17－27 頁、2014 年  
10 月

「欧州版 IAS/IFRS の公私協働関係論」

『企業会計』（中央経済社）67巻1号、158－165頁、2015年1月

「資本市場規制とドイツ会計法改革」

『九州情報大学論集』第17巻，2015年（平成27年）3月

桑野 裕文

「大学運動部のあり方『文武両道のためのプログラム』」

『九州情報大学研究論集』第17巻，2015年（平成27年）3月（予定）

「スポーツにおける安全対策（ラグビーにおける夏季の合宿対策・落雷対策）」 セーフティアシスタント講習会，福岡大学（2014年7月20日）・久留米高専（2014年7月26日）・アステムの森（2014年8月24日）

「スポーツ少年団リーダーにもとめられるもの」 スポーツ少年団指導者リーダー講習会，久留米市勤労青少年ホールオリンピック記念体育館，2014年7月13日

「シニアの体力（体力測定と講義）」 太宰府市シニア教室，太宰府市体育館，2014年10月20日

「子ども達に夢を」 男女共同参画フェア、福岡大学病院メディカルホール、2015年3月8日(予定)

#### 【社会活動】

福岡県ラグビーフットボール協会安全対策委員長，安全推進講習会，2014年4月

#### 【陸上競技部指導実績】

第84回九州学生陸上競技対抗選手権大会（2014年5月16日～18日、博多の森陸上競技場）、男子4×100mR 優勝、男子砲丸投げ優勝

天皇賜杯第84回日本学生陸上競技対抗選手権大会（2014年9月5日～7日、熊谷スポーツ文化公園）、出場種目（砲丸投げ、4×100m、4×400m）

坂根 純輝

「2014年に改正された日本公認会計士協会の倫理規則の検討」

－概念的枠組みアプローチの有効性の確立という視座からの検討－

九州情報大学研究論集第 17 巻 2015 年 3 月

進藤 康子

「大隈言道研究 年譜編第Ⅱ部」

九州情報大学研究論集第 17 巻 2015 年 3 月

栖原 淑郎

「補間法により設計された狭帯域低域低感度デジタルフィルタ」

九州情報大学研究論集第 17 巻 2015 年 3 月

武石 洋介

第 2 回国際女子相撲選抜堺大会(2016.4.13)出場.  
第 31 回全日本大学選抜相撲宇和島大会（2016.4.29）団体,ベスト 8.  
第 54 回全国大学選抜宇佐大会（2016.5.3）出場.  
第 15 回西日本選抜女子相撲大会（2016.5.11）出場.  
第 64 回西日本学生相撲新人選手権大会（2016.5.11）団体,準優勝.個人,  
ベスト 8,大原 祐介.  
第 88 回西日本学生相撲選手権大会（2016.6.1）団体,第 3 位,個人,ベスト  
8,梅崎 恭輔,中井 巧,海上 弘行.  
第 15 回全国学生女子相撲選手権大会(2016.7.6)個人,軽量級,優勝,井上  
瞳.  
第 74 回西日本選抜学生相撲大会（2016.7.6）団体,5 位,個人,第 4 位,大村  
泰平.  
第 4 回全日本大学選抜相撲金沢大会（2016.7.20）出場.  
第 5 回全日本女子相撲郡上大会(2016.7.26)個人,軽量級,優勝,井上 瞳.  
第 39 回西日本学生相撲個人体重別選手権大会（2016.7.27）65kg 未満級,  
優勝,池知 雅貴,85kg 未満級,準優勝,川崎 潤樹,ベスト 8,照喜名 清  
貴,100kg 未満級,ベスト 8,梅崎 誠二郎,115kg 未満級,優勝,水鳥川 優,  
ベスト 8,原 広樹,村田 亮加,135kg 以上級,ベスト 8,梅崎 恭輔,林 健  
太郎,無差別級,優勝,中井 巧,ベスト 8,大村 泰平.  
第 49 回全日本大学選抜相撲十和田大会（2016.8.14）出場.  
第 62 回全国選抜大学・実業団相撲刈谷大会(2016.9.14)出場.  
第 39 回全国学生相撲個人体重別選手権大会（2016.9.21）65kg 未満級,

第3位,池知 雅貴,85kg 未満級,第3位,川崎 潤樹,ベスト8,照喜名 清貴,115kg 未満級,準優勝.水鳥川 優,135kg 未満級,ベスト 8,海上 弘行.

第19回全日本女子相撲選手権大会(2016.10.26)個人,超軽量級,優勝,井上 瞳.

第92回全国学生相撲選手権大会(2016.11.8-9)団体,ベスト8.

第63回全日本相撲選手権大会(2016.12.7)出場,中井 巧.

中居 文治

「引用の作法」

ー引用の観点からみた「ゲーテと複式簿記」ー

九州情報大学研究論集第17巻 2015年3月

中山 彰信

『教行信証の研究』

(出版社)永田文昌堂 (京都) 平成26年7月7日

橋口 捷久

「大学生の学習態度調査の数量化分析」

九州情報大学研究論集第17巻 2015年3月

波多江 俊介

「小学校教員の休暇取得に関する学校組織要因の分析」

九州情報大学研究論集第17巻 2015年3月

平田 毅

「鹿児島県・甕島における「アイランドキャンパス」の取り組み」

ー九州情報大学地域情報センターの実践報告ー

九州情報大学研究論集第 17 巻 2015 年 3 月

藤内 響子

「英語動詞の命題補部について」

九州情報大学研究論集第 17 巻 2015 年 3 月

南 俊朗

Toshiro Minami “An Analysis of Interest Area Similarities by Utilizing the Loan Records of Library.” Proc. IADIS International Journal on Computer Science and Information Systems (IJCSIS), Vol. 8, No. 1, pp. 112-129 (2013) ISSN: 1646-3692 （査読有）

Toshiro Minami and Kensuke Baba

“A Study on Finding Potential Group of Patrons from Library’ s Loan Records.” International Journal of Advanced Smart Convergence (IJASC), Vol. 2, No. 2, pp.23-26 (2013) （査読有）

Toshiro Minami and Kensuke Baba

“KNOWLEDGE FIELD REORGANIZATION FOR THE LIBRARY PATRONS’ INTEREST AREA ANALYSIS -- AN INVESTIGATION FOR NEXT-GENERATION E-LIBRARY SERVICES --.” Proc. 7th IADIS International Conference on Information Systems 2014 (IS 2014), pp. 103-110 (2014) （査読有）

Kensuke Baba, Mayumi Koyanagi and Toshiro Minami

“Paper Registration Request System for Improvement of Uploading Ratio.” Journal UMP, Vol.5, pp. 41-52, 2012 (2014) （査読有）

南俊朗，馬場謙介

「図書館貸出データを用いた学習グループ候補の発見ー利用者の社会的ネットワーク発見の試み」九州情報大学研究論集第 16 巻, pp. 13-25 (2014)

Mitsuru Kitajima, Kensuke Baba and Toshiro Minami

“An Evaluation of Book Selection in a University Library by Loan Record Analysis.” Proc. 2014 6th International Conference on Education Technology and Computer (ICETC), in International Journal of Information and Education Technology, Vol.5 No.10, pp. 728-731 (2014)  
(査読有)

南 俊朗

「図書館マーケティングから大学 IR (機関研究) へー図書館データ解析への期待ー」九州大学附属図書館研究開発室年報 2013/2014, pp. 8-17. (2014)

Kensuke Baba, Toshiro Minami, and Sachio Hirokawa

“Should University Library Collect New Books or Old Books?-- An Obsolescence Analysis for Book Selection --.” Proc. The International Symposium on Advanced and Applied Convergence (ISAAC 2014), in J.J.Kang et al.(eds) ISAAC 2014 & ICACT 2014, AACL 03, pp.34-37. (2014) (査読有, 招待論文)

Toshiro Minami and Yoko Ohura

“A Correlation Analysis of Student's Attitude and Outcome of Lectures --Investigation of Keywords in Class-Evaluation Questionnaire--.” Proc. Advanced Science and Technology Letters (ASTL), Vol.73 (FGCN 2014), pp.11-16. (2014) (査読有)

Toshiro Minami and Kensuke Baba

“Knowledge Field Re-Categorization to Tune the Decimal Classification System of Library - An Approach from Library Data Analysis -.” IADIS International Journal on WWW/Internet (IJWI), Vol.12, No. 1, pp.65-80, ISSN: 1645-7641 (2014) (査読有)

南 俊朗

国際会議プログラム委員

「The 6th International Conference on Information, Process, and Knowledge Management (eKNOW 2014)」

「6th International Conference on Intelligent Decision Technologies (KES-IDT-14)」

「The 10th International Conference on Advanced Data Mining and Applications (ADMA2014)」

「The 2014 Pacific Rim Knowledge Acquisition Workshop (PKAW2014)」

「5th International Conference on E-Service and Knowledge Management (ESKM2014) . Special Session Organizer: Complex Event Processing and Machine Learning, Library Science」

「The 2nd International Symposium on Advanced and Applied Convergence (ISAAC2014)」, セッション座長

「The 7th International Conference on Database Theory and Application (DTA2014)」

「The Seventh International Conference on Information, Process, and Knowledge Management (eKNOW2015)」

「The Second International Conference on Soft Computing and Data Mining (SCDM2015)」

南 俊朗

「図書館データ解析が拓く新世代図書館への期待」丸善株式会社,  
大学図書館業務委託現場責任者研修会招待講演

南 俊朗

「情報セキュリティの基礎－被害者にならないためにできること－」  
公開講座講師

南 俊朗

「クリッカーを用いたアクティブラーニング授業への試み」学内 FD  
研修会

南 俊朗

「学内・図書館データ連携の可能性を探る－データ解析による学習  
支援サービス深化のために－」福岡県・佐賀県大学図書館協議会福  
岡地区研究会講演

和田 悌

宗像ミュージックアカデミーピアノ演奏会 講師演奏

福津市 津屋崎カメリアホール 大ホール 平成25年9月14日

ピアノ演奏会「和」 Freude am Klavierspielen

福岡市 杜のみのりホール 平成25年12月10日



五 穴山健二「翻刻大言道自筆『乙巳集』」福岡女子短大紀要43(1992) 六 歌の会合。校註一二参照。

七 言道独特の表現。木のもとでの歌の会合まとりをする。

八 言道の二女うめの婿で養子

九 言道の二女うめの長男。

一〇 春日政治氏の「春野集を見る」『能古』昭和五年八月。のちに『春日政治著作集』第八卷(昭和六十年十二月)において、一部を紹介。また、山本嘉将「大隈言道 春野集」昭和39年九月(和歌文学会配り本)で全容がわかった。(春野集小林本太田富子氏蔵)

一一 飯塚での言道の門人。『草径集』上梓の折にはかなりの援助をした。言道の序を伴う歌集『豊後の道の記』、『自詠集中抄』などがある。

進藤康子「大隈言道自筆資料『自詠集中抄』小林重治家集」(九州情報大 学研究論集)十号(2008)参照。

一二『類題和歌鴨川集』長沢伴雄撰。初編は嘉永元年、二編「次郎集」は同三年、三編「三郎集」は同四年、四編「四郎集」は同五年、五編「五郎集」は同七年に出版。総歌数一万千首。紀州藩士であつたが、獄中で自刀したので第五編で終わった。

一三 進藤康子『言道の月次歌会「まとゐ」をめぐつて―付翻刻九大本『仲秋卷一』「香椎潟」第四二号

進藤康子「野村望東尼『雜歌草稿二』―『向陵集』との關連において(續)『文獻探究』四五号

進藤康子「望東尼『みのとしうまのとし』―『向陵集』との關連において(下)『文獻探究』四四号参照。

一四 有明高専十八号「翻刻 野村望東自筆『講歌集』」穴山健翻刻。

一五 福岡今泉の人。登とも称す。無足組。廃藩後大宰府の神官となる。明治四三年没。八二歳。

一六 「己午」は安政四年であり、言道の出立も安政四年である事から望東の書き間違ひと思われる。安政三年と明記した項が数丁前にある。

一七 言道門下。望東尼の歌友。

一八 四宮素行、琢藏。言道門下。望東尼の縁者で彼女は我が子の様にかわいがった。

一九 福岡市博多区二股瀬

二〇 野阪豊次郎常興。言道の高弟。『類題鴨川五郎集』に入集。

二一 次号にて付す。

二二 高弟野阪常興が福岡から上坂し、暫く言道の身の回りの世話をした。

二三 熊谷直好。通称八十八。桂園門下。桂門十哲の一人。『古今集正義序注追考』『浦の汐貝』等著す。文久二年没。八一歳。

二四 萩原広道。江戸後期の国学者。号は萩園(にらぞの)。備前の人。本居宣長に私淑し、大國隆正に師事。著「源氏物語評釈」「本学提綱」など。文久三年没、四八歳。

- なりけり)
- 26・誰枝者折之等雖場作樂不答華能色叙可南之幾  
(たがえだはをりしといへばにはさくらこたへぬはなのいろぞかなしき)
- 27・所狭隣々平隔有世能中蓄能務都可之氣成  
(ところせくとなりとなりをへだてたるよのながきのむつかしげなる)
- 28・誘往力都可麗而散花平流水耳讓山風  
(さそひゆくちからつかれてちるはなをながるるみづにゆづるやまかぜ)
- 29・春來者吾臥庵能内二手裳行通蝶能以久樂等母難之  
(はるくればわがふせいほのうちまでもゆきかふてふのいくらともなし)
- 30・往方者松場原杉原雖隔何等裳無耳和多留白雲  
(ゆくかたはひばらずぎはらへだつれどなにともしにわたるしらくも)
- 31・往方者志多比見乍帰雁止難久裳睡留老哉  
(ゆくかたはしたひみながらかへるかりとどめがたくもねぶるおいかな)
- 32・末東樓目者寄副庵能柱共一樹能花能心地古所為礼  
(まどろめばよりそふいほのはしらさへひときのはなのこことこそすれ)
- 33・唯一庭耳落在松能実能更耳母不落暮今日哉  
(ただひとつにはにおちたるまつのみものさらにもおちずくるるけふかな)
- 34・等裳為者散往花乎贈來而蝶副蝶等誤來  
(ともすればちりゆくはなをおくりきててふさへてふとあやまたりけり)
- 35・間近等念者近之久樂暗耳乱手所見海人能漁火  
(まぢかしとおもへばちかしくらやみにみだれてみゆるあまのいさりび)
- 36・寂寥三二掌乎耳組而在物乎小草者露之玉乎持來  
(さびしさにてをのくみてあるものををぐさはつゆのたまをもちけり)
- 37・伏庵能奥二手塵裳掃在乎佐耳者以樂伝去留月影

- (ふせいほのおくまでちりもはらへるをさのみはいらでいぬるつきかげ)
- 38・終夜吹西軒能松風能不所聞計今朝者所聞  
(よもすがらふきにしのきのまつかぜのきこえぬばかりけさはきこえぬ)
- 39・如索撓在山路觀和多世者其期東句行吾心可南  
(つなのごとたわめるやまちみわたせばそのごとくいくわがところかな)
- 40・戸指管出而不見者也安耶十八耳籠在庵平照数月影  
(とざしついでてみねばやあやにくにこもれるいほをてらすつきかげ)
- 41・薺能開花愛耳被棄而殘在庵能燈影  
(あさがほのさくはなめでにすてられてのこれるいほのともしびのかげ)
- 42・人影裳無而寒氣寸大路哉往方遠久月者雖為照  
(ひとかげもなくさむけきおほかなゆくかたとほくつきはてらせど)
- 43・翡翠能水耳落入音谷裳今日者不所聞人裳不訪而  
(かはせみのみずにおちいるおとだにもけふはきこえずひととはずて)
- 安政丁巳中冬 大隈言道漫書
- 〔つづく〕
- 校註
- 一 自筆稿本は平岡良助所蔵。『大隈言道』佐佐木信綱・梅野満雄共著  
二 波多野幸彦氏が「近代書道グラフ」5号(1963)に「大隈言道と蓮月尼」の特集を組み紹介。  
三 言道は心身ともに疲れ果てていた時期、門下生達が見舞い支えた。  
四 右同。

(ふるさとのいたみのしみづわればかりきたりてけふをつきの  
みぞしる)

3・音裳不為而吾門能戸耳何時從耶在明能月之影者照在

(おともせでわがかどのとにいつよりやありあけのつきのかげ  
はてらせる)

4・釀置之吾而製裳未鋪耳保古樓日出壺能煤哉

(かみおきしわがてづくりもまだしきにはころびいづるつぼの  
うめかな)

5・少女等稻荷籠庵能戸耳招而立在華薄哉

(をとめらがいねおひこむるいほのとにまねきてたてるはなす  
すきかな)

6・月觀乍深世流我乎寢覺子弟未寢耶等人等波麗敬利

(つきみつつかせるわれをねざめていまだねずやとひとと  
はれけり)

7・貴樂麗都流事裳得不知爪木副木芽春耳者逢古々遅可難

(きられつることもえしらずつまきさへこのめはるにはあふこ  
こちかな)

8・塵掃者清真砂裳副来而一未耳成為善裳惡裳

(ちりはけばきよきまさごもさそひきてひとつになせるよきも  
わるきも)

9・怜月指入流妻戸從無理出夕煙哉

(おもしろくつきさしいるつまどよりわりなくいづるゆふけ  
ぶりかな)

10・儼川能汀能鴨能等望年夫理置並多留物等見二手

(なのかわのみぎはのかものともねぶりおきならべたるものと  
みるまで)

11・唯一立者皆立朋千鳥佐手社思等知耳者在敬礼

(ただひとつたてばみなたつともちどりさてこそおもひどちに  
はありけれ)

12・棣棠能零枝耳裳為可理不得手流蛙鳴耳耶有樂務

(やまぶきのしづくえだにもすがりえでながるるかはずなくに  
やあるらむ)

13・打集而佐耳鳴而者百千鳥何能声毛聞和可寔国

(うちむれてさのみなきてはももちどりいづれのこゑもききわ  
かなくに)

14・耶摩郷能柱那麗耶立乍松乎籠而裳家乎造作在

(やまさとのはしらなれやたちながらまつをこめてもいへをつ  
くれる)

15・朝旦積在雪乎湯耳焚而溪能清水裳不汲比可難

(あさなあさなつもれるゆきをゆにたきてたにのしみづもくま  
ぬころかな)

16・田面從吾門指而來人能近着奴問尔誰等新樂者也

(たのもよりわがかどさしてくるひとのちかづかぬまにたれと  
しらばや)

17・無果御世腦長裳不知子弟広執顔耳步行尺獲

(はてもなきみよのながさもしらずしてひろとりがほにあゆむ  
しやくとり)

18・道能辺耳脱捨良麗之藁履能上谷清積留白雪

(みちのべにぬぎすてられしわらぐつのうへだにきよくつもる  
しらゆき)

19・馴奴麗婆耶我弟憂可樂奴方裳那之不栖伝住卷欲貴山里

(なれぬればやがてうからぬかたもなしすまですままくほしき  
やまざと)

20・華見二等何時耶往敬務人那樂武帰乎見而叙驚可麗奴流

(はなみにといつやゆきけむひとならむかへるをみてぞおどろ  
かれぬる)

21・傾而吾隱所能伏庵乎見入顔耳母照月影

(かたぶきてわがこもりどのふせいほをみいれがほにもてらす  
つきかげ)

22・爰左右手裳夜半耳者波能打寄而松耳懸有塵芥可難

(ここまでもよはにはなみのうちよせてまつにかけたるちりあ  
くたかな)

23・珂怜古々地為者耶作樂花散所米之從止時能無

(おもしろきこちすればやさくらばなちりそめしとりやむと  
きのなき)

24・我期東九酒耳醉樂詩音立而拍者拍手乎真似留山彦

(わがごとくさけにゑふらしおとたててうてばうつてをまぬる  
やまびこ)

25・月花耳向日而耳裳在狙乎顧為者憂世也希理

(つきはなにむかへてのみもあらましをかへりみすれはうきよ

島の長橋を三つ合わせたらむやうなる大橋を はるか望む川端にて かわは淀川となる川口にて いと景よろしき故 今は命ものぶばかりなるを あまりに知る人多くなりて、騒がしけれど世渡りぐさのよすがなれば、すべなくかつらひ侍る

言道の高弟、野阪常興は、自らも上坂し、言道の生活の細かな手伝いをした。また、福岡を立つ前に『ひとりごち』を与えた真藤利明へは、十二月五日付けで次に見る。

唯自由之宜而已にて風がなる事はさらに無御座 ただ名利の地に御座候 まばらに人の頼み候物など書揮いたし候ばかりにて万葉仮字もよめ不申候位之土地に而 万事御察可被下候 春は上京いたし 嵐山 吉野 また早春には月の瀬之梅十五村を尋可申と存罷在り候 大坂は筑前よりも人氣鈍く 一体山遠くして雨ふるもやう 雪もさのみはふらず星のギラツク夜天もなく人情平らか也 まこと難波わたりの春野けしきを読めることなり(中略) わたくし事も歌には退屈なし。人情のシマリには困り申候(後略)

「人の頼み候物など書揮いたし候ばかりにて 万葉仮字もよめ不申候位之土地に而」と言道のプライドがここまで言わしめたのか。ある人から歌を頼まれたので、我が歌を、万葉仮名でわざわざ書いてあげたのに、その仮名が読めないとは。大坂人の程度はそれぐらいの土地柄だと強がっている。しかしながら「人氣鈍く」、「人情のシマリには困り申候」に於いては、なかなか人氣が出ない、大坂人の輪に入っていない、なじめない実情を書き記している。

#### ●言道書簡(十一月二九日付)

さて、もう一通は、佐々木信綱、梅野満雄は「宛名がわからないが」としている手紙。梅野満雄は、手紙の中盤のみ抜粋し、前半と後半部分を省いて検証している。しかしながら、このたび九州大学にある原翰をみると、左の翻字で示した「小林重治ぬし」如く、実は、飯塚の門下生小林重治宛であり、十一月二九日の日付が在る。書簡の全部に目を通してはじめて、異邦人として馴れない土地で、

大坂人に抱いた特別な言道の印象を知ることが出来る。それを愛弟子小林重治に次の様に書いた。三

わたくし無異今程梅檀木橋第二楼中の島のすさき鳧居室と号し申し候：唯閑静を宗として独居毎日鍋一つのかしぎ 主従一人三……ここもと弟子新社中見候処 爰は愚の愚 黄面先生の弥陀のみ道人たちゆる其の方黄金の山わたくし住居の向ひ かしまや雁治 日本第一の金のかたまり御座候 一つも羨ましからず……歌詠みは熊谷<sup>三</sup> 萩原<sup>四</sup> 遠行いたし候につき名家もなく(後略)

#### 言道

小林重治ぬし

十一月廿九日

右の手紙より、「唯閑静を宗として独居 毎日鍋一つのかしぎ主従一人」といったつましい生活をしていた言道は「わたくし住居の向ひ かしまや雁治 日本一の金のかたまり御座候。一つも羨ましからず」と強気な発言をしており、言道の本音が伺われる。金持ちをあからさまに非難するようなことはかつて言道にはみられなかった。しかし、大坂での生活に慣れてくると、生活のためには、かえって金持ちの太鼓持ちと成り、金持ちに取り入るような歌があるかと思えば、その一方で、言道は、当時の歌壇文壇で高名な熊谷直好や萩原広道らとの交わりもあり、文人との交流の輪が広がる。難波において万葉仮名で書かれた言道の歌。視覚的味わいをも加味した四十三首である。言道は生活のために、我うたを万葉仮名にして、求める人に与えた。しかし大坂人はなかなか「万葉仮名もよめず」と不満をもらしている。

#### ●『(安政丁巳中冬 大隈言道漫書軸)』(桑原氏所蔵) 言道自筆。四三首。真字書。

- 1・東望為波野辺能霞能我可楽等可々気而見数流高宮能郷(ともすればのべのかすみわれからとかかけてみするたかみやのさと)
- 2・故郷脳坂井之清水吾計来而今日乎月耳叙志流

安政 四年 丁巳 (1857) 六十歳

○八月、『陸田雑歌』成る。(福岡県立図書館紙焼) 言道自筆歌集。六五首。

○八月十五日、言道、大坂へ向かうため福岡を発つ。

『ひとりごち』を真藤利明<sup>二五</sup>に与える。

『ひとりごち』の末尾に、

「此巻は 我師大隈言道大人の大坂に登らする時 生かたみとして 奉書紙に歌六十首と源氏年立三巻を贈らるるに添へ給へる也 利明」と、真藤利明の自筆による書き入れがある。

この書き入れには安政四年八月一日との記載があるため『ひとりごち』の成立がこのころだとする論がいくつか生まれてしまったのであるが、実は『ひとりごち』に書かれている「天保の民は天保に生きたとわかる歌を歌うべきだ」との内容から判断して、書かれた年代は安政年間ではなく、天保年間であり得る。加えて、言道の娘が嫁ぐ折にはすでに完成し、嫁入り本として持参させた経緯がある。

次に、野村望東尼『向稜集』の左の一文をみると、言道が大坂へ向かう時の別れを惜しむ様子が和歌を織り込みながら、情感が切々と描かれている。

安政三己午<sup>一六</sup>のとしの八月十五日に大隈言道うしの都にのぼらんと、にはかに思ひたゝれければ、とゝむべきことにもあらず、わりなくわかれず、とておなじく六日に、わがいほりにむかへける時

わがこゝろいへばかくなりおもはなむよしおもはでもたえてしのばん

さてそのひになれば、かしこに行ておくりすとして たひらかに帰りますませいふまにもわがいのちさへかつおもふかな

千代の松原までおくらむといでたちけるにあるかたにより玉ひければ、石秀<sup>一七</sup>はそなたにくしゆく素行<sup>一八</sup>ぬしとふたり、かの松原先に行て待ける間に

都よりきみかへりくとまつばらにかくてありなばいたのしきやをらまち得てふたまたせ<sup>一九</sup>のはしまでみなしたひゆけばそこまでいたりてわかるとて

きみとわがうみ山遠くへだつとも月はかたみに見るべかりけり

都にいでたゝれてのち芦屋のみなとに舟まちて、かしこにてあきもくれゆくまでいでたゝでなどきゝし時よみておくらんとて

なにはえにゆくともゆかぬかりふしはよしやあしやとおもひこそやれ 『向稜集』

これらの場面に関しては、拙稿「野村望東尼『雑歌草稿二』『向稜集』との関連において(続)」『文献探究』(45)2007-03、同拙稿「望東尼『みのとしうまのとし』―『向稜集』との関連において(下)」『文献探究』(44)2006-03 で、詳しく述べている。

○十月、大阪に着く。中ノ島にある筑前藩の蔵屋敷に暫し滞在する。当時藩の勘定奉行は言道の弟子である生田久繁で、大坂の銀主方とも交際があった。生田はおりしも大坂詰方中となっていたので、蔵屋敷に寄寓する事が出来と由が『大隈言道傳』で知る事ができる。

○十一月、中ノ島の洲崎梅壇の木橋第二楼に住む。その居を観水居と称し、鳧居室と名付けたという、その当時の言道の手紙を数通、特に筑紫いそ子に当てた手紙を辿ると、大坂での生活がはじまり、想像以上に苦勞している様子が彷彿とされる。

こゝに参りし時は、御屋敷はいと物せはしくて、片時たえず侍りしかば(中略)また家をかへ侍りて、今の処いと狭くきたなけれど、大工などものして、たてぐ畳などそれこれとするに、萬の調度一つたらずでは、家もつこと能はず。此ほど常興<sup>二〇</sup>。まゐりて、朝よひの見ぐるしきおのれが手助かりにはなり侍れどすり鉢すりこぎなども未だ侍らず。

これにて事のたらはで、よろづさげぬをしろしめすべし。さはいへいとこころやすく人のさまにならぬこころよき、今はいとよくありつき侍りてなむ なには橋 天神橋 天満橋 中の

歌まきをつくりて人の歌のよしあしをいふこと、はたちあまり二とせ三とせにやなるらむ。其の久しきにたえず物したるもあり、また、たえてものせぬ人もあり。はた世をさりたるもあり。なからよりよみはじめたるも、ちかきもあれど、おのが教のおろかなるには、おもしろき歌などあはれなるなど詠み出でて、師ははだしなどいふ俚言にたがはず、嬉しとも嬉し。そもそもおのれがつたなきのみにあらず。むかしの歌の歌まねのみにて、いづれも今まで年ふることいと久しければ、後の世に笑われなむものから、やおらかくまでなしたるは、むげにいひそしるべきにあらず。猶すたれたるわざならめど、たけたる人よく見わかちてこの道いやましくさく花のごと、世に傳はれかし

安政二年八月一日

大隈言道しるす

『詠草 文月の巻 奥書』(『大隈言道翁傳』)

○この頃の暮『講歌集』<sup>二四</sup> 成る。野村望東自筆歌集(穴山健氏蔵)

言道門下生達、盛んに歌巻を作る。『講歌集』により、その言道門下歌会における言道の指導の様子を詳しく知ることができる。言道の講評を望東が書き留めたものであり、言道の講評は、未知の事跡の一部を埋める好資料(穴山氏)で、望東尼『向稜集』に採られていない、若き日の野村もとの歌がある。

初冬のうたあはせの中に  
かれる田のくろにもふせるそほつ哉もるわさはてしこゝろやす  
さに

十二月うたあはせによめる中にて

ゆきゝゆる枝よりうめのはな見えてあさひかゝやくつゆのしら  
玉  
『向稜集』

安政 三年 丙辰 (1856) 五九歳

○言道門下の歌会まとゐの実情を次に挙げる。

正月うたあはせに 安政三 梅

ともしびのかげうごかしてまどのとのすきまの風にかよふうめ

がゝ

『向稜集』

ねまちばかりによひのまくりければ、みなふしたりしに、あかつきの月はいかに／＼と、戸をたゝくこゑをきけば、さゝのやの翁のおどろかさるゝなりけり。貞貫君もよろこびていそぎとをあげ見るに、月いときよし。やがてあかつきの月はいかにとたゝくとにはれたるそらをねやにしりつる

蚊やどもまくりのけて、酒さかなやうのものとついであつゝものがたるうち、あけはなるゝそらことにきよし、山のはいづる日かげもまためづらし

ありあけの月見ながらにさゝぬとをさしていりくるあさひかげかな  
『向稜集』

神無月九日庭の紅葉の盛りなりければ、さゝのやの翁をはじめかれこれとあして、さま／＼のうたよみける中にしたばよりまたうらばより秋萩のこゝろ／＼のうす紅葉かなあるじゝてもみち見るひはよそになくたづかねさへぞおのがものなる

このよしくれのいたくふりければ、人々こゝにとまりけるに翁はあかつきよりひごとに歌三十あまりもよめば、あけはてぬまにかへらむ、などいはるゝまゝ、すゝり箱紙など枕べにおきて、こゝにてよみ玉へ、などいひおきてねたりしに、あさいしたるほどくかへら(れ)けるをしらで、そのあとにて、みぎのかみを見るにひとつだにけしきばみたるすぢもなく、けさもきのふの老のしらかみ、とあければ、かへしにとておなじことを

一葉だにもみちもちれるけしきなくけさもきのふのまゝのくれ  
なゐ  
『向稜集』

さゝのやの翁のとしごとにいひづかに行て、春をくらしてのみ帰らるれば、ことしもさもやとていひつかはしけるはるごとにきみをとゝむるいひづかのさとのさくらはきりもすてゝむ

『向稜集』

嘉永五年 壬子 (1852) 五五歳

○『壬子集』(所在不明)

『大隈言道家集』に其の一部が収録されており、末尾に「壬子集六百四十二首ノ内」とあり、『壬子集』は六百四十二首であった。また、「己上九年ノウタ凡一萬首余ソノウチヨリ此一冊トナルコノマエツカタ若年ヨリノウタ南樓集ササノ屋集アリ」と、言道の注記があることから、『南樓集』『ささのや集』の存在していた事が知られるが、現在においては、所在不明である。

嘉永六年 癸丑 (1853) 五六歳

○吉井町への旅。この旅に関する言道書簡を次にみる事ができる

御宅を立候て秋月あまぎ屋に折角御添書被下候へ共(中略)□  
□ぬし方に四、五日滞在いたしそれより吉井に参り候処、これはかのかたに一兩人知人も有之、ここにはまた長滞に相成申候  
久留米 田代よりも参り候様申来候へ友 長旅につき まづ志  
波の方に引取 それより朝日を経て 一昨二十五日帰宅仕候  
梅野満雄『大隈言道傳』

志波や吉井は 言道の祖先のゆかりの町で、久留米や田代の門人宅に行く時は、幾度か立ち寄ったものとおもわれる。

嘉永七年(安政元年十一月二七日改元) 甲寅(1854) 五七歳

◇一月『鴨川五郎集』三(長沢伴雄編)刊。言道の弟子達の歌が、一六八首入集。

○二月、『嘉永七年詠草』(福岡市博物館蔵)二百十二首。言道詠草。(現在、言道自筆詠草とされているが、なめらかで美しい筆跡からしても、言道の手とは少し違っている。手元の資料と照らし合わせると、高弟の野村望東尼の手による筆録ではないかと思われる。こ

の詠草の奥書には、和歌を志す初学の人々への、言道の理念を窺い知ることができるので、次に挙げる。

(前略) わがむそぢゝかきにいたりて、うひ学びのわざは、かのひぐれ道とほくならめど、まことおくれでたる身はいかゝはせむ。そも今しばらくながらへてあらば、またかたはしづゝよみうるうたもあらましとて、たゞ詞の自在をまなびて わがこゝろのまゝにいひならひなましとしかばと思ふばかりのねがひになむ(中略) 詞の自在におのが心をゆかめず、あらたにいはんこといかゝなる人かやすらかむ、つたなきうたなれどそのこゝろをしれらむ人は、わがつたなきうたもさ計はわらはじかし  
嘉永七年寅二月

大隈言道 谷川幹辰ぬしに

●『仲秋の巻一』三(九州大学図書館蔵)言道門下集、言道浄書。

●『中秋之巻二』(大山家蔵)言道門下歌集。(所在不明)

●『葉月左之巻三卷合撰』(福岡市立博物館)言道門下歌集。  
この紙背の書き入れに「甲辰 もと子」とある。

●『葉月左之巻一』『葉月左之巻二』『葉月左之巻三』(所在不明)言道門下歌集。

●『霜月之巻一二三合撰』(福岡市立博物館)言道門下歌集。  
この紙背の書き入れに「甲辰 石玕」とある。

●『霜月之巻一』『霜月之巻二』『霜月之巻三』(所在不明)言道門下歌集。

安政 二年 乙卯 (1855) 五八歳

○八月一日、『文月の巻』成る。言道自筆詠草。奥書には言道の門下歌会をはじめた十数年前のころの回想が綴られている。

中ぞらのくもまに見えしかげのみや月のさかりのしるしならまし  
『向稜集』

としのくれ  
かたりあひてとしのくるゝをゝしむまに春のまとゐにならむとす  
らむ  
『己酉集』(『大隈言道家集』)

○二月十二日、上座郡上寺村の教念寺において祖先大隈主水助治言の二百五十年の法要を催す。言道は病氣のため欠席したことが『甲辰集』の詞書に書かれている。

酉二月十二日、上寺村元祖大隈主水助治言二百五十回同村教念寺にて法事執行しけるに、則此寺主水開基にて代々子孫なれば、住僧よりいひ遣しけるに、このごろ病ひにてえいかずうちむれて玉まつりする人かずにこころばかりはいらむとぞおもふ  
『甲辰集』(『大隈言道家集』)

◇田代正良<sup>ハ</sup>は藩主黒田長溥に従って江戸へ。祐筆として勤める。

○言道の初孫、鉄之亟<sup>ル</sup>が生まれたのはこのころか。毎日百首以上歌を読んでいた言道も、『大隈言道傳』によると、あまりのうれしさに孫に気を取られ、この日ばかりは、六十首しか詠めなかったという。其の時の歌。

初春にいだきそめたるをのこ孫わがてのうちの玉ぞこの玉

『大隈言道家集』

○『己酉集』(所在不明)『大隈言道家集』に其の一部が収録されており、末尾に「右己酉集五百六十七首ノ中」とあり、『己酉集』は五百六十七首であった。

嘉永三年 庚戌(1850) 五三歳

○言道門下歌会まとゐ。

花まだしきころ馴花亭にて人々うたよみける時、花下といふ

ことを桜のもとにして

たゝひとへさくを待得ておのがどちはなのもとゐをけふはじむ也  
このもとにゑひぬる人のありさまを見てだに花も猶わらひなむ  
もりさだぬしがいへの糸さくらの花見にゆきしに、まろふど  
あまたいたりたきりしかば、ゆきとしぬしが庭なる柳のかげに  
まとゐしてよめる

よの人に花のこのもとといとられて柳のかげにまとゐするかな

『向稜集』

○『庚戌集』(所在不明)『大隈言道家集』に其の一部が収録されており、末尾に「右庚戌集七百六十六首ノ内」とあり、『庚戌集』は七百六十六首であった。

嘉永四年 辛亥(1851) 五四歳

●言道の月次歌会開始の明確な提言があったことが次からわかる。

嘉永四年のはるのはじめ

老そふるとしをねしまにかさねてもけさのねざめのこゝちよきかな  
正月つごもりにさゝのやに行きける時、けふをはじめとして  
月ごとにをしむまとゐをせむと翁のいはれければ、みなをかしとて、よふくるまでまとゐをして

くれはつるはるのはてにはあらねどもまづ一月をゝしむよはかな  
きさらぎのつごもりれいのまとゐをして

月ごとにをしむまとゐをおのがどちことしはじめていつまでかする

『向稜集』

○初夏、『春野集』。(小林本)成る、一七一首。言道自筆歌集。小林重治<sup>二</sup>に贈る。奥書から、この「小林本」は、十一年前、天保十一年成立の「谷川本」を下敷きに行っている事がわかる。ほとんど内容を変えずに、『春野集』を何回も書き贈っており、言道のこの集に対する完成度の高さへの自信と特別な愛着をみる。



○『甲辰集』成立か。『大隈言道家集』の中に、『甲辰集』から選出された歌郡が収録されている。『甲辰集』の抄の末尾に言道の注記が「右甲辰集撰出八百八十八ノ中」、また、『壬生集』の最後の注記にも、「甲辰集弘化元年ヨリ嘉永元年迄五年ノ集ナリ」とある。

弘化二年 乙巳 (1845) 四八歳

○十二月二十三日『乙巳集』<sup>五</sup> 成る。言道自筆歌集。二百十三首。卷子本。佐伯常貞に贈る。

言道の妻の死後から二年間に詠出した歌を集めたもので、『甲辰集』と重なるうたが十九首ある。『こそこのちり』を練り直し『ひとりごち』を完成させていった頃と重なる。つまり、自分の歌風を確立していった時期の歌集である。奥書を次に記す。

ひのくれゆくまゝによくもみえずいまだかく  
べきうたもあれどあやまりぬることのみ  
なるべければよからぬうたをわづらはしく  
さのみはとてかいさし侍る。そも／＼この巻は  
おのれをとゝしの冬より二とせばかりの  
まによみいでつるうたなるを、かゝるものにかい  
のこしなむは、ゆくすゑまでの人わらへなるべ  
けれど、こはるゝまゝにかくはものしつるなり。  
たゝまなびのしるべにとてまゐらすのみ  
なりけり 弘化二年十二月廿三日

佐伯常貞ぬし

大隈言道

◇野村貞貫、もと(望東尼)夫妻、向の稜(平尾山荘)に隠棲する。

嘉永元年 戊申 (1848) 五一歳

◇八月二十九日、言道の母(刀工信国又左衛門光昌女)没。七九歳。香正寺に葬る。法名、残岳院妙照日秋信女。

◇十二月二五日、言道の弟、清右衛門言則没。四九歳。法名、古竹有声行年四九。妻は博多川端町山端久作女。『清原姓大隈氏系譜』

●『田家集』(政所氏蔵) 六十首、言道自筆歌集。

嘉永二年 己酉 (1849) 五二歳

●この頃からまとゐ<sup>六</sup>や、もとゐ<sup>七</sup>がはじまり、門下生とともに、しばしば歌会を催したことが、野村望東(望東尼)や、言道の歌集からわかる。まず望東尼『向稜集』などから、その事例を引用する。

はつはるの、うたあはせによめるうた 『向稜集』

さゝのやの翁(言道)きたれけるひに

さくらばなちるたびごとにいかなればきみはこぬやといひつゝぞ  
見し 『向稜集』

平尾なる山のたかねの松のもとゐしたるとき、言道翁、にゆるゆも松のおとたてつなり、とかいつけていだされければ  
このものおちばかきよせ火をたけば(ママ) 『向稜集』

このひ明石ゆきとしぬしがいへに、翁をはじめかれこれつど  
ひせらるゝに、おのれにもなどありしを、ぬひものゝいそぐ  
ことありとて、得ゆかざりしかば、そのことゝもいひやるつ  
ひでに

おにやらふこゑもきこえぬやまさとはまたきにはるのたつとしも  
なし 『向稜集』

つごもりにとしをしむわざせん、とて翁などきたられしかば、  
さま／＼ものかきわざともするをりから、たねこがきぬのそ  
での白きゝぬをこし、これに何かゝいつけてよとありしかば、  
竹をかきて

いたづらにまたひとゝせもくれたけのよはいのふしのかずのみぞ  
つむ 『向稜集』

八月うたあはせに、雲間名月といふ題に

## 大隈言道研究

## 年譜編第Ⅱ部

進藤 康子

## 要旨

幕末の博多の歌人、大隈言道（おおくまことみち）の年譜稿第Ⅱ部。言道の四六歳（1842年）から六〇歳（1857年）まで。言道家集である『草徑集』出版することを目指し、六〇歳で上坂するまでの文学的営為とその事跡を記す。凡例は「大隈言道研究 年譜編第Ⅰ部」（前号第16巻）参照。

## キーワード

大隈言道 草徑集 野村望東尼 向陵集 鴨川集 小林重治 宝月楼  
熊谷直好 萩原広道 村山漢古

天保十四年 癸卯（1843） 四六歳

◇五月二十四日、妻、四二歳にて没。法名、夏岳院妙雲信女。香正寺に葬る。妻は、福岡中名島町大熊清次郎娘。（前号第Ⅰ部参照）

めなるものみまかりける後に松  
いぶせしときりにし門の松だにもなきあと見ればものぞかなしき

「戊午集」『大隈言道家集』

ことし五月末つ方、妻におくれて、いとものさびしく、世の中わびしくてありけるに、慰めがてら庭にやり水を流して、木などうゑける時、

にはかにもながるゝ水のうれしきはゆきかふ魚と我となりけり  
うかりつる心やり水ながるればかなしきことのある身ともなし

「ささのや集」『大隈言道傳』

天保十四年五月廿四日にさゝのやの翁のつまぎみ うせられて  
て七日にあたるひに

なき人のわすれがたみものばれて手向に折れるなでしこの花

『向稜集』

## ●歌論『ひとりごち』成立か。

○この頃『差都貴帖』三成る。（波多野幸彦氏蔵）言道自筆歌集、大本一冊。真字書二七首

弘化元年 甲辰（1844） 四七歳

○妻の死後、言道は体調を崩し病に伏していた。門下生中村石玘から、言道は見舞いの梅を一枝送られたことなどが、次の長歌からわかる。

ことしとしのはじめよりいとわづらひてふせりてのみありけるに、  
中村石玘のもとよりうめの花のいとをかしきを見せけるに

かすみ立はるべになればのに山にうめこそにほへ

たがさともさかりときけどそのふにも

にほふといへどふせる身はかをだにかがず

よもすがらなげきあかせるしきたへの

枕がもとにこころありて人の見せける梅のはな

ただこのはるはこのひとえのみ<sup>三</sup>

『甲辰集』『大隈言道家集』

おなじ時さくらの枝を人のえさせければ

てにとればしぬるいのちもいきぬべき此一枝の山ざくらかな<sup>四</sup>

『甲辰集』『大隈言道家集』

## 『九州情報大学研究論集』 執筆要領

### 投稿規約

1. 本誌への投稿者は、原則として九州情報大学および同学術研究所所属の研究者（助手・非常勤講師を含む）および九州情報大学大学院学生とする。（共同執筆の場合は、執筆者の1名以上が上記要件を満たしていること）。ただし大学院学生が単独で投稿する場合、原稿の掲載は大学院委員会の推薦に基づくものとする。また、単位取得退学者の投稿は退学後3年以内とする。その扱いは在学大学院学生に準ずる。なお紀要編集委員会は、当該分野の専門家の意見を聞くことができる。
2. 本誌に掲載する論文等は、いずれも他に未発表のものに限る。
3. 投稿する者は、紀要編集委員会が定める書式（「執筆要領」参照）に従い、期日までに、投稿の旨を届け出る。
4. 原稿は所定の執筆要領に従って作成して提出する。

### 執筆要領

1. 論文と研究ノート、書評の分量は次のとおりとする。
  - (1) 論文は、12,000字以上20,000字以内を原則とする。
  - (2) 研究ノートは、12,000字以内とする。
  - (3) 書評は、4,000字以内とする。
2. 論文と研究ノートには、本文（図表等を含む）のほか、表題紙および要約（邦文および欧文の双方もしくはいずれか一方のみを著者の必要に応じて）を添付する。ただし、研究ノートの要約の添付については筆者の任意とし、添付する場合には邦文要約のみとする。
  - (1) 表題紙には、題名の全文、欧文題名、著者名を記す。
  - (2) 邦文要約は、500字以内のものを本文前に添付する。欧文要約は、300語以内とする。
3. 投稿原稿の書式の基本的な原則は以下のとおりとする。
  - (1) 原稿は、A4判横書き（右開きA3）、2段組、一行22文字、42行とする。要約は横書き、1段組み、一行39文字とする。ただし写真、図表等はこの限りではない。  
原稿の性質上、1段組、一行52文字を望む場合は紀要編集委員会に申し出ること。
  - (2) 文字サイズについては、次のようにする。
 

①原稿種別	全角10.5ポイント
②表題	全角14ポイント、太字
③氏名	全角12ポイント、太字
④本文	全角10.5ポイント
⑤要約	全角9ポイント
⑥その他：注記や参考文献などについては、執筆者の必要に応じて文字サイズを縮小することができる。	

- (3) 書体は和文が MS 明朝、欧文は Times New Roman とする。ただし部分的に太字や他の字体を使用することは認める。
- (4) 余白は、左 20mm、右 20mmとする。
- (5) 章、節の表記については、原則として、「 1. (1) (a) 」 または「 I 1. (1) (a) 」の順とする。
- (6) 本文中の引用文は「 」でくくり、文献名を次項(7)の形式に従い明記する。
- (7) 参照文献は、著者名、発行年、題名、出版社の順に記述する。その際、邦文の書名は『 』でくくり、欧文の書名はイタリック体にするか下線を引く。また、参照文献が論文の場合、邦文論文は「 」で、欧文論文は“ ”でくくり、出典の書名等を明記する。
- (8) 注（註）と文献リストを別にする。参照文献の本文・注（註）等における挙示は、〔著者名 発行年： ページ数〕とする。
- (9) 注（註）は、本文中の該当箇所（の右肩）に番号をうち、注（註）自体は、各章末、各頁脚注、または本文末にまとめて記載する。
- (10) 図表は順に番号をうち、本文中に挿入箇所を指示する。著作権への配慮は怠らないよう留意する。
- (11) 紀要編集委員会は、上記(1)～(10)の事項に限って、紀要編集委員会の判断で執筆者に修正を求める場合がある。

上記以外の書式を希望する場合は、紀要編集委員会で検討し、正当な理由があると認められれば許可する。

- 4. 原則として投稿原稿は、Microsoft Word、ないしは LaTeX で入力すること。  
なお、上記執筆要領に沿う Microsoft Word 書かれたテンプレートを用意しているので、原稿を書かれる際には利用可能である。
- 5. 投稿原稿は、電子メディア（フロッピー、CD ディスク等、著者名と表題を明記したラベルを貼付すること）と印字した原稿 1 部の両方を指定の期日までに紀要編集委員会へ提出しなければならない。手書き原稿は受理しない。ただし、メールで投稿原稿や校正原稿を授受する場合は、その方法について、紀要編集委員会から具体的に指示をする。  
上記以外の場合は、紀要編集委員会で検討し、正当な理由があると認められれば許可する。
- 6. 提出された原稿は、論文、研究ノート、翻訳の順で掲載する。それぞれ種別内では、基本的に五十音順（執筆者名）で掲載する。特集・共同研究等、紀要編集委員会で認めたものは、巻頭に配置する。
- 7. 論集の印刷判型は投稿原稿の書式とし、A4 判左綴じとする。
- 8. 執筆者の校正は、最大 2 回までとする。
- 9. 原稿の採否は、編集委員会が委嘱する匿名レフェリーの審査に基づき、編集委員会が決定する。条件付で採用の場合、必要な修正が指示される。この場合、投稿を辞退することができる。

以上

## 執筆者紹介（掲載順）

甘 長 青	九州情報大学	経営情報学部	准教授
木 下 勝 一	九州情報大学	経営情報学部	教授
坂 根 純 輝	九州情報大学	経営情報学部	講師
栖 原 淑 郎	九州情報大学	経営情報学部	准教授
中 居 文 治	九州情報大学	経営情報学部	教授
橋 口 捷 久	九州情報大学	経営情報学部	教授
波 多 江 俊 介	九州情報大学	非常勤講師	
南 俊 朗	九州情報大学	経営情報学部	教授
大 浦 洋 子	九州情報大学	経営情報学部	教授
秋 吉 浩 志	九州情報大学	経営情報学部	准教授
岸 川 洋	九州情報大学	経営情報学部	教授
合 田 和 正	九州情報大学	経営情報学部	准教授
桑 野 裕 文	九州情報大学	経営情報学部	教授
平 田 毅	九州情報大学	経営情報学部	教授
藤 内 響 子	九州情報大学	経営情報学部	准教授
進 藤 康 子	九州情報大学	非常勤講師	

## 編集後記

この研究論集が本学の研究成果を学外に発信する一つの有力な手段、媒体として認知されかどうかは、ひとえに掲載される論文の質量によって決まるといえる。近年博士後期課程の院生の学位審査請求の要件として、大学がレフェリーチェックを受けた論文かどうかを何本以上と数で求めるようになった傾向を受けて、院生の発表や論文がいずれの学会でも著増している。若手学究の研究には、テーマに真正面から向かい合っているものが多く、語学に堪能な国際派も増えているので、ベテランにも近刊の著名論文を逆に知る機会として重宝で、若手の活躍は歓迎されてよい。しかし、現代の混沌とした時代相の中では、ベテランの深い読みと知識の蓄積には、やはり貴重な見識として期待が大きい。

本誌にも、今年度はベテランの先生方が多数投稿してくださった。発信する側として、質量ともに実り多い論集をお届けできることを喜ぶたい。学外のレフェリーの方たちの誠心誠意を込めたコメントに感謝すべきは当然であるが、本誌の充実をますます期したいとの意を強くしたことをお伝えできるのが、なによりの喜びである。(2015年3月 編集子)

### 九州情報大学研究論集 第17巻

2015年(平成27年)3月31日 発行

編集兼発行者 研究論集編集委員会

発 行 所 九 州 情 報 大 学  
福岡県太宰府市宰府六丁目3番1号  
TEL 092 (928) 4000 (代)

印 刷 所 エース印刷株式会社  
福岡市中央区大濠一丁目6-9  
TEL 092 (741) 9090



BULLETIN  
KYUSHU INSTITUTE OF INFORMATION SCIENCES  
Vol. 17

---

■ Articles

- Taking a Glance at the Internationalization of RMB from Currency Swap Agreement  
..... Gan Changqing
- Regulation of Capital Market and Reform of German Accounting Law  
— Accounting Strategy of German Government —  
..... Katsuichi Kinoshita
- Examination of “the Code of Ethics for Japanese Professional Accountants” of the Revised in 2014  
— For Establishment of the Effectiveness of the Framework —  
..... Yoshiteru Sakane
- Narrow Band Lowpass IIR Digital Filter with Low Sensitivity Designed by Interpolation Method  
..... Yoshiro Suhara
- Rules of Quotation — Double-entry Bookkeeping in Goethe —  
..... Bunji Nakai
- A Hayashi's quantification theory analysis of learning attitude in college student  
..... Katsuhisa Hashiguchi
- Investigating Effect of Elementary School Organization for Being Submitted a Request for a Leave  
..... Schnsuke Hatae
- An Investigation of the Contributions of Students' Study Attitudes to their Learning Outcomes —  
Attempting to Modelling Students with their Study Attitudes from Self/Lecture Evaluation  
Questionnaire— ..... Toshiro Minami and Yoko Ohura

■ Research note

- Effort towards Careers in Industry–University Cooperation Seminar II  
— Turn to the Trial to “Active Learning” Using Social Media — ..... Koji Akiyoshi
- Master by the creation of robot app — through Robot Contest participation —  
..... Hiroshi Kishikawa Yoshiro Suhara Kazumasa Gouda
- The State of a University Athletics Club — The Program for “Literary-and-Military-arts both  
Ways” — ..... Hirofumi Kuwano
- Practice Reports of the “Island campus” Projects in Koshiki Islands by KIIS  
..... Takeshi Hirata
- A Note on the Comparative Analysis of the Propositional Complements of Verbs  
..... Kyoko Fujiuchi
- Okuma Kotomichi Basic Research — A Chronological List of the Main Events–Section II —  
..... Yasuko Shindou

■ Scholarly Achievements 2014